

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	MOLLIS矢切		
○保護者評価実施期間	2026年2月1日		2026年3月1日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	13	(回答者数) 10
○従業者評価実施期間	2026年3月1日		2026年3月10日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 6
○事業者向け自己評価表作成日	2026年3月20日		

○分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	① 幼稚園併設による一貫した支援環境 日常の集団生活の中での子どもの姿を踏まえ、実態に即した個別支援ができる点。生活と療育が分断されない支援が実現できている。	園内での子どもの様子を日常的に観察し、職員間で共有することで、生活場面での姿を踏まえた個別支援計画の作成・実践を行っている。 また、園と連携しながら、集団生活と個別支援が分断されないような関わりを意識している。	園での様子と療育での支援内容のつながりを、保護者に対してより分かりやすく伝える仕組みを整える。 また、園との連携内容を記録・言語化し、支援の質の均一化と再現性の向上を図る。
2	② 個別支援と小集団活動の組み合わせ 一人ひとりの特性や発達段階に応じた個別支援に加え、小集団活動を通じて社会性や対人関係の育ちも支援できる点。	個別支援においては一人ひとりの課題に応じた関わりを行いながら、小集団活動を通じて対人関係や社会性の育ちを支援している。 活動内容については子どもの発達段階や特性に応じて柔軟に設計している。	小集団活動のねらいや支援意図について、保護者への説明を強化し、支援内容の可視化を進める。 また、活動内容を体系化・言語化することで、職員間での共有と支援の再現性向上を図る。
3	③ チームでの支援体制と継続的な振り返り 日々のミーティングや情報共有を通じて、子どもの状態や関わり方をチームで検討し、支援の質を高め続けている点。	日々のミーティングや振り返りを通じて、子どもの状態や支援方法について職員間で共有・検討する体制を整えている。 個々の支援を属人的にせず、チームとして最適な関わりを検討することを意識している。	振り返りの内容や意思決定プロセスを記録・整理し、支援の標準化とナレッジの蓄積を進める。 また、評価・改善のサイクルを仕組み化し、継続的に支援の質向上につなげていく。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	① 受け入れ体制・利用枠の制約 利用ニーズの増加に対して、人員体制や提供枠の設計が十分に追いついていない点。支援の質を担保するため受け入れ数を調整しているが、結果としてキャンセル待ちが発生している。	利用ニーズの増加に対して、人員体制や提供枠の設計が十分に追いついていない状況がある。 また、支援の質を担保する観点から受け入れ数を調整している側面もあり、結果としてキャンセル待ちが発生している。	人員配置やシフトの最適化を図るとともに、支援提供時間や枠の見直しを行い、受け入れ体制の拡充を検討する。 あわせて、採用および育成の強化により、安定的に受け入れ可能な体制づくりを進める。
2	② 支援内容の可視化・伝達の不足 小集団活動や日々の支援について、そのねらいや意図が保護者に十分に伝わっていない点。支援は行われているものの、内容の見えづらさが課題となっている。	小集団活動や日々の支援内容について、そのねらいや意図が保護者に十分に伝わっていない場合がある。 また、記録やフィードバックの方法にばらつきがあり、情報共有の質に差が生じている。	支援内容やねらいを分かりやすく言語化し、保護者へのフィードバックの質と統一性を高める。 また、記録フォーマットや共有方法を整備し、支援の可視化と一貫した情報提供を行う体制を構築する。
3	③ 支援の標準化・再現性の不足 日々の振り返りや情報共有は行われているが、支援内容や判断基準が個々の職員に依存する部分がある点。支援の質にばらつきが生じる可能性がある。	日々の振り返りや情報共有は行われているものの、支援内容や判断基準が個々の職員に依存する部分がある。 そのため、支援の質にばらつきが生じる可能性や、ナレッジの蓄積が十分でない点が課題となっている。	支援方法や判断基準を言語化・整理し、職員間で共有することで支援の標準化を図る。 あわせて、振り返りや評価のプロセスを仕組み化し、継続的に改善・蓄積される体制を構築する。